
魔王さまの憂鬱

祀希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王さまの憂鬱

【コード】

N80830

【作者名】

祀希

【あらすじ】

一瞬、目の前が白く光って体の芯に響くような痛みが全身を襲った。そして気付いたときには、

「……………だれ？」

目の前には金髪碧眼の王子さまがいらっしやいました。

「魔王」として異世界トリップしちゃった女の子とそんな主人公を溺愛する幼馴染みとか王子様とか魔物たちのお話。

暴力表現・流血表現ないとは思いますが、作品の構成上入っている場合があります。苦手な方はリターン。
逆ハーマがいますが、主人公ドライなため甘々あらず。

魔物の祈願と魔王の帰還

空を覆うは先の見えぬ黒。いつもなら黒に光を穿つ月も、連日の雨雲に隠されてしまっている。夜目のきかぬ人間に頼りになるのは魔物の物を刺激せぬよう申し訳程度に灯った松明の明かりのみ。それも時折吹く湿気を含んだ風に今にも消えそうに揺らめいている。

「……魔の物よ。何をそんなにざわめいておられる」

よく響くバリトン。その声だけで何人もの女性を虜にできそうな美声の持ち主、名をヤーリヤ・ハリス。王国一級魔術師の称号をもちながら陰では研究に狂った変人と噂される、シルヴァニア王国第三王子付きの魔術師である。

「……これがざわめかずにいられようか」

答える声は闇の先。低く空気を震わせる声の主は言葉とは裏腹にひどく落ち着いた口調だった。

ばさり、と何かが羽ばたく音がして松明の火がふつりと消える。完全な暗闇に動揺する背後の近衛たちの気配に苦笑しつつ、ハリスは

暗闇から目を逸らさなかった。

魔術において最も大切なことは、何モノにも気圧されず、何事も恐れない精神力である。研究に狂った変人と噂されようが、才に溺れるうつけと蔑まれようが王国一級魔術師の称号は伊達ではない。暗闇を恐れることなど、しない。

(……それよりも畏れるべきは、)

いつでも術の行使ができるよう思考の片隅でセナと呼ばれる詞を詠唱しながら、闇を見据えた。

(魔の物がざわめく中心にいるモノ、だよね)

またばさりという羽音と共に一陣の風が吹き、今度は辺りが一気に明るくなった。

「これがざわめかずにいられようか。我らが主、魔王が御帰還されたのだ」

急な光に思わず閉じていた目をゆっくりと開けた。

視界にまず飛び込んできたのは金に輝くしなやかな肢体に真っ黒な

翼をもつジーンラウデイス、彼の王の僕とされる魔物である。その凍てつく眼差しで行動の自由を奪い、鋭い牙で獲物の魂を喰らう。喰らわれた魂は生前の善行・悪行に関わらず、転生の環に入ることはかなわない。永遠にこの地をさ迷う亡霊になるのだという。人語を理解し、魂を喰らうことで魔術師すら敵わぬ魔力を有する最強にして最悪の魔。

今までに何度か魔の物たちと争った記録があるが、ジーンラウデイスは歴史の表舞台にほとんど出てこない。民衆の間でも子どもを戒める脅し文句として知られている程度だ。だが、ハリスは知っている。ジーンラウデイスが表舞台に登場しないのは力が及ばないからでも王の不興を買ったからでもない。強すぎる(・・・)のだ。その強大な力故にヒトごとき争うときには出てくる必要がない。

ジーンラウデイスから少し距離をあげた隣、ハリスたちに興味を向けることすら億劫だといわんばかりに視線を逸らしたままの魔物はガリケイドポマス。垂れた耳に白銀の毛並み、大きさは大型犬を一回り大きくした程度。ふさふさとした尾が二つに分かれ、額にも一つ目があることを除けば大きい飼い犬のようにも見える。二つに分かれた尾は言葉の真偽を確かめるためにあるといわれ、聞かれた問いに嘘を答えれば噛み殺してしまう。額にある目は魔力が宿り、そのモノ自身が望めばその視線だけで国一つ滅ぼすことすら可能だという。

この魔物もまた、魔王の僕である。ガリケイドポマスは争いの最前線を好む。めったに出てこないジーンラウデイスは対照的にガリケイドポマスはどの文献にもその名を残す。未だ額の瞳の力は使われたことはないが、ガリケイドポマスは気まぐれ。いつどんな気まぐれでその力を使うか分からない。未知数なジーンラウデイスに比べれば力が分かっている分対抗もできるが、ヒトの敵う相手ではない。

その二匹に挟まれて、ふわふわとした白い綿の上で眠るのは人型をしたモノだった。それも2人いるように見える。折り重なるようにして眠るのはどちらも少女のようだった。

1人はさして珍しくもない薄茶色の髪で、ふわふわとカールしたそれを低い位置で緩く束ねてあった。ティスにしては短い履き物から伸びる足は細く、肌は黄色っぽい見たことのない色をしているが荒れている様子はなからどこかの貴族の娘だろう。顔はこちらを向いていないから分からないが、背格好を見るにまだ幼い子どものようだ。

子どもが魔の物に浚われることは珍しいことではない。ここ最近では少なかったが、それでも全くなかったわけではない。王府に被害届は出されていないから、異国の娘かもしれない。

もう1人はまるで夜闇を切り取ったような漆黒の髪を持つ少女だった。まだあどけなさを残す娘は二匹の魔物に囲まれてもなお、安心してきつたように眠っている。うつすらと開いた赤い唇からは寝息が漏れ、幼いというのに艶やかさを伴う。短い履き物から覗く白い足はすらりとしていて、もう数年も経てば美しい娘になるであろうことが想像できた。

「魔王、ですか……？」

魔王とは本来血筋に関係なく、力のみで選ばれた魔の物たちを束ねるモノだ。力の大きさに比例して寿命が長くなるが、魔王となれる

ほど力のあるモノが生まれることは少ない。先代の王が死んだのは、記録によるともう4000年前のことだ。この4000年の間、力のあるモノは生まれず魔の物たちのまとまりは皆無。国中至るところで魔の物による被害が届けられていた。

今回、ハリスが魔の物が住まう魔界にやって来たのもそのせいである。最近、魔の物による被害が一段と増えた。それでも我関せずの態度を貫く王家に国民からの不満は高まるばかり。魔王不在で荒れている魔の物相手にできることなどないに等しいが、国としては力を尽くしたという印象をもたせたい。そこで王国一級魔術師であるハリスが遣わされたのである。そこまではよかったのだが……

「ジーンラウデイス、それはヒトに見えるのだが。それでも魔王と？」

……シルヴァニア王国第三王子、シルヴァニア・セルターニャ・シファードも共に遣わされることが問題だった。王としては厄介ことの種であるシファードも一緒に魔界へ送ることで王宮の体面を保ち、あわよくば……、と考えたのだろうか。

（失敗だったよね、コイツを王宮から出したことは）

シファードは元から自室にこもり王国の歴史やら経済の流れやらを学ぶことが好きでない。どちらかというと近衛や騎士たちと一緒にあって馬に乗り、剣を振るう方が好きな質で今回の魔界遠征もその奥の意味を知らぬはずがないのに「ありがたき幸せ」と快諾。それ

でまた第三王子健気説に新たな伝説が加えられたわけだが、本人はちりりとも気にしていないだろう。というか、気付いていないにちがいない。王宮から出れる。いくらポーカーフェイスを気取っていても頭の中はそればかりだったにちがいないのだから。

「……ほう、これは珍しい。人王の御子がこんな地の果てまでわざわざ出向かれるとは。ヒトはよほど切羽詰まっているのか、それともただの厄介払いか。どちらにせよ、我らには都合のいいことだ。子どもの血肉もよいが、ヒトの王の肉もうまい」

ガリケイドポマスが3つの目をキラリと輝かせて言う。今にも舌なめずりしそうなその様子にシファードの回りを囲む近衛たちに緊張が走るが、当の本人は気にした様子もない。

「残念ながら、ガリケイドポマス。わたしは娼婦との間に生まれた忌み子。ご期待に添えるほどうまい血肉はもっていない」

皮肉にそう笑って最前に立つハリスの横に並んだ。

(……………まったく、)

ハリスは平然と隣に立つ乳兄弟に呆れた視線を向ける。

輝く金髪にサファイアのように澄んだ水色の瞳。その瞳に宿る知の

光も端正な顔立ちも、たしかな血筋から生まれた異母兄弟より現王にそっくりだと言うのに。母親が名も知れぬ娼婦というだけで厄介者扱いされる第三王子。本人は見るもの全ての視線を奪うほどの美貌にはまるで無頓着だし、王位にも一切興味を示さないが周りはそのとはとらない。“忌まわしき王子”、“望まれぬ御子”、“狂乱の王子”などなど数々の通り名がつけられた。

第一王子は体が弱く、第二王子は手のつけようのない馬鹿だし、第四王子は生まれたばかりの赤ん坊。それでも次期王権は第三王子以外の御子にという声は多い。もともと本人は王子継承の可能性が薄いことをいいことに武術にのめりこみ、充実した日々を送っているが。しかし、それが王宮仕えの者たちには「王宮内での他貴族からの嫌味や蔑みの視線に耐え、武術を極めることでせめて戦場で役に立とうとしていらっしやる健気な王子」に見えるらしい。「穢らわしい娼婦の子だとしてもシフアード様には罪はないのにお可哀想に」と侍女を始めとする下働きの者たちから多大な同情票を獲得しているのだが、本人は知らないだろう。真相を知るのはしよっちゅう自室から抜け出す王子を探しに走るお付きの近衛と毎回訓練と銘打った憂さ晴らしに付き合わされる訓練所の近衛や騎士たちだけである。

自分を喰らってもうまくない、と真剣に返したシフアードを心底おかしそうに笑ってガリケイドポマスはつい、と額の瞳をジーンラウデイスに向けた。

「おかしいなことを言うヒトもいたものだ。なあ、ジーン。喰らうてもうまくないだと。そう言われては喰らう気も失せるな」

「黙れ、ガリケイドポマス。今は喰らう喰らわぬの話をしているわ

けではない。魔王が御帰還されたのだ。諸々の儀式が終わった後でならうまい王子を喰らおうがまずい王子を喰らおうが好きにすればよい」

ジーンラウデイスは素っ気なく言い返す。それに慣れているのか、ガリケイドポマスはククツと笑いをこらえながら「そうしよう」と頷いた。

「……ジーンラウデイス、もう一度お聞きします。その方が魔王と？」

ハリスの問いにジーンラウデイスは生真面目に頷く。黒翼が動きに合わせて揺れ、羽が一枚ひらりと舞った。

「いかにも。我らは知っていた、もう何百年と前から。待ち続けたのだ、彼の方のご帰還を。月の隠れるこの日、最強にして最高の王が我らが元にお還りになられることを」

「ですが、人型をしております。魔の物が人型をとるなど、聞いたことが……」

控えめに言った言葉にジーンラウデイスが牙をむいた。

「我らを愚弄するか、魔の力を操る者よ。我らが主の力を読み間違

えたと？何百年に渡り待ち望んだ我らが主はニセモノであると？忌々しき神に祈るほど恋い焦がれ、待ちわびた王はそなたらと同じ種族と申すか」

「そういうわけでは……」

鋭い視線を向けられてハリスは思わず一步後ろへ退いた。ハリスが気圧されるほどの強い視線だった。

「……んう？」

それまですやすやと幼子のように眠っていた黒髪の少女がむくりと起き上がった。黒曜石のような漆黒の濡れた瞳が隣に立つジーンラウデイスたちを見た。状況が分からないのか一度瞬きをしてから不思議そうにハリスを見上げ、それからシフアードに視線を向けて首を傾げた。

「……だれ？」

寝起きの掠れたか細い声でかけられた問いにぴくりと反応するシフアードを視界の隅に捉え、ハリスは波乱の予感に深くため息をついたのだった。

魔物の祈願と魔王の帰還（後書き）

新作です。よろしくお願ひします。

王子の懸想と魔王の回想 1

シルヴァニア王国第三王子、シルヴァニア・セルターニャ・シファードは足早に自室への道のりを歩いていった。手には今までのシファードなら絶対に買わなかったであろう甘い匂いを放つ菓子のみ。それも貴族の娘が好むような見てもよし食べてもよしな金のかかった菓子ではなく、一般に民たちが食べるような素朴なものだ。

“彼女”は高級なものよりこういうものを好む。懐かしい味がする、と言っているもは無表情な顔に微かな笑みを浮かべてくれるのだ。

……そう、シファードが早々と実戦訓練を切り上げて自室へ急ぎ、似合わぬ菓子を抱えている理由はただ1つ。ちょうど1週間ほど前に帰還した魔の物たちの王、アカリのためである。

重い木製の扉を開けると床に座り込んで分厚い本を広げるアカリがいた。肩まである黒髪を邪魔にならぬように高い位置で1つに束ねてあり、剥き出しになったうなじに零れる後れ髪が扇情的でシファードは唾を飲み込む。本に落とされた視線は真剣そのもので、甘く鬱陶しい臭いをさせてしなだれかかってくる女どももよりずっと静かで美しい。

あの月の隠れる夜、2匹の魔の物に挟まれて眠っていた少女は魔王とは思えぬほど美しい娘だった。蜂蜜を溶かしたような柔らかい色合いの肌に、夜闇のような黒い髪。くつきりとした二重の瞳は髪と

同じ闇色で、いつも溢れんばかりの正義感と好奇心に輝いている。小さな赤い唇が紡ぐ声は鈴を転がすようで、名前を呼ばれると訳もなく嬉しくなる。

武術バカの第三王子が異国の美少女に首ったけ。ゴシップが大好物の王宮内はそんな噂に花を咲かせた。今まで武術にしか興味を示さず、王子をモノにしようとして送り込まれる娘たちにも見向きもしなかった第三王子が毎日菓子を持って少女の元へ通いつめているのだ。それに加え少女は見たことのないような漆黒を宿す美しい娘。噂のタネになるのも無理はなかった。

そんな渦中の少女は今日も菓子の入った包みを抱えてやって来た王子サマに露骨に顔をしかめた。

「……毎日、毎日よく飽きないですね」

明らかに呆れたような声音にも関わらず、シファードは「もちろん」と楽しげに頷いて彼女と同じように床に座り込む。

何を読んでいたのかと覗き込むと見知らぬ言葉で何やら補足が書かれた世界地図。ぎっしりと文字が埋まり、辛うじて国の形が分かる程度にまでなっている。

「熱心だな、アカリは」

いつも訪ねれば本を開き、インク壺片手に羽根ペンを握っている少女は事も無げにそう言ってペン立てに羽根ペンを挿す。

羽根ペンとメモ用紙は物欲が極端に少ないアカリが唯一欲しいと望んだものだった。真っ白な羽根に薄青の斑模様の入った羽根ペン。渡したときは珍しく目を輝かせて喜んでいた。

最初は手を真っ黒にしながざこちなくペンを走らせていたアカリだが、地図に書き込まれた記号のような文字を見る限りもう慣れたらしい。インクを飛ばすことなく文字が書き連ねてあった。

「そんなことないですよ。あたしは赤ん坊みたいなものですから。世界のことを少しでも知りたいだけです」

パタリと本を閉じて言うアカリの澄んだ瞳がつい、とシファードを捉えた。

その黒曜石のような瞳の中に自分が映っているのを見てシファードは思わず唾を飲み込む。彼女の芯の強さを宿す瞳に見つめられるとそのまま押し倒して自分のものにしてしまいたくなる。どうしようもない衝動を押し込めてシファードは冷静を取り繕って少女の瞳を見つめ返した。

「立ってください、第三王子殿。そんなんでも王子さまなんですよ？床に座っちゃいけません。怒られるのはあたしなんですよ？」

小さな唇から漏れる声は少し低めで、耳に心地よい。でもその声で

「第三王子殿」と呼ばれるのは好きでなくて、シファードは眉を寄せた。

「別に王子になりたくてなつたわけじゃない」

アカリまでそんなこと言うのか、とそつぽを向けば倍の不機嫌さで返された。

「なりたかったとかなりたくなかったとか関係ありません。いいですか、セルターニヤ様。あなたはお・う・じ、なんです。分かります？王位継承が第何位なのか知りませんし興味もありませんけど、それでも王子なんです。お願いですからそれらしく振る舞ってください。何度も言いますが、怒られるのはあたしなんですから」

「アカリは王子らしい男が好きか？」

王子らしく、王子らしくと繰り返すアカリにふと思いつく。

「はあ？」

「それならオレも王子らしい男に近付けるように頑張る」

呆れきつた視線を向けてくる少女に至極真面目な顔で告げる。

その瞳に何を見たのか少女は諦めたようにため息をついた。

「あー、はいはい。あたしは王子サマみたいな男が好きです。だからセルターニヤ様、もう少し王子サマらしい行動を志してくださいね」

それから付け足された「怒られるのはあたしなんですから」というもう3度目になるセリフにシルヴァニア王国第三王子、シルヴァニア・セルターニヤ・シファードは満足げに頷いたのであった。

事の始まりは1週間前。予備校の夏期講習を終えた帰り道のことだった。

辞書みたいに分厚い参考書の入った鞆を肩に提げ、よろよろと歩くあたしの耳に入ったのは聞き覚えのある可愛らしい声。

「やつ、やめてください……っ！」

「いいじゃーん、一緒にお茶するくらいさあ」

カラフルな頭のおにーさんたちに囲まれて涙目になっている美少女、
花柳 美咲^{ハナヤキ ミサキ}。あたしの幼馴染みである彼女は持ち前のキューティー
フェイスをフル活用して今日もナンパされていた。

高校に入ってから染めた薄茶の髪はふわふわしていて、高3にもな
って未だに中学生に間違えられる彼女にはよく似合っていたし、薔
薇色の頬も小さな唇も細い割りに大きな胸も異性どころか同性にま
で愛される可愛さ要素満天だっことは重々承知だ。でもだからっ
てこの子はナンパされすぎじゃないだろうか。あたしの記憶違いじ
やなければ、一昨日もナンパから助け出したと思うのだけど。

「ねー、おにーさんたち。なんか楽しそうなことしてんね？」

「あ？なんだ、このアマ」

能天気な声をかけたあたしを低い声で凄んでくる金髪野郎と顔を青
くさせるその他メンバー。どうやら世間知らずはこの金髪野郎らし
い。

「…………アカリちゃんっ！」

可愛らしい声であたしの名前を呼んでパアツと顔を華やがせる我が
幼馴染み。この子の辞書に警戒心という文字はない。

それが悪いことだとは言わないけど、あんたはもう少し人を警戒す

るべきだよ。

「ンだよ、ねーちゃん。ねーちゃんもオレたちの相手してくれるってか？」

ギャハハと下卑た笑い声を上げる金髪野郎ににっこり笑い返して。それから重い拳を鳩尾に叩き込んでやった。

ぐっ、と蹲る金髪野郎をわらわらとその他仲間が取り囲む。尚もあたしに凄もつと身動きする金髪野郎にお仲間さんたちが口々に忠告する。

「テツ、やめとけつて！コイツあれだ、“死神”だぞ。おまえも知つてんだろ、この前^{サタン}袷丹を潰したのコイツだぞ！？」

「“死神”？この女がか？」

痛みに顔を歪めながらも信じられないと言わんばかりにあたしに視線を向けてきた金髪野郎に一步近づく。合わせて一步下がるナンパ少年たち。本能的に危険を察知したらしい。なかなか素晴らしい勘をお持ちだ。

「はん、予想外？天下に名高い“死神”が女子高生なんて考えつきもしないでしょうね、その空っぽの頭じゃ」

「んだと……っ！」

「テツやめろって！」

お仲間さんたちに抑えられ、目だけギラギラさせてこちらを睨んでくる金髪野郎。あたしはそれにとこりと笑みを深めた。

「親切なお仲間さんたちの忠告通り大人しくしてた方が利口だと思うけど。その子返してくれるなら何もしないけど、そっちがやってくるんならあたしだって容赦しないよ。ほら、世の中正当防衛って言葉もあるしさ、世間が味方すんのは非力な女子高生の方だと思うけど」

おまえのそれは過剰防衛だ、と兄貴に何度も言われるけど決して過剰なんかじゃない。

こっちはか弱い女子高生なのだ。恐怖で手が滑って、気絶させるはずだった痴漢サンの腕の骨が何本か逝っちゃうなんてザラにある。次の日の朝、満員電車の中であたしの周りだけキレイに人がいなくなっていたことは記憶に新しい。

まあそれはともかく、か弱い女子高生の正当防衛は怖いんだゾ？と大して可愛くもない笑顔を浮かべてみせたら、ナンパ少年たちは一目散に逃げていった。まったく失礼なヤツらだ。ミサキが笑えば、嬉々として近づくくせに。

「で、ミサキ。あんたはまたどうしてこんなところ？」

あたしに引っ付いて様子を伺っていた幼馴染みに尋ねれば、「お買物だよ？」と可愛らしく首を傾げられた。

この子は昔から放浪癖がある。ふらふらーとどこかに出掛けて夜中まで帰ってこないことなんてしょっちゅうだし、あたしが見かけるときは大抵薄暗い路地裏で「君可愛いねー」とナンパされている。その度にあたしが男どもを蹴散らすんだけど、一度この辺りを縄張りにする暴走族（どうでもいいけど、暴走族なんて時代遅れだと思っただけ？）のボスも蹴散らしてしまって、しかもついウツカリ勝ってしまったものだから“死神”なんてカツコ悪いあだ名を付けられてこの辺りの不良少年たちに恐れられることになってしまった。なんでも『ナンパ中に黒髪の女を見かけたら即逃げろ』が合言葉らしい。それならナンパしなければいいのに、と思うのだが男というものはそうもいかないらしい。

いや、違う。男の性なんて今はどうでもいい。

問題はこの子だ。またほつといたらフラフラとナンパに引っ掛かってしまいそうだし、まだ買物が残ってるならそれに付き合っ一緒に帰ろう。どうせ家は隣同士。予備校で使いきった脳味噌が糖分を求めてるけどそれは無視して、ミサキの買物に付き合うことに決めた。

……それが、後に後悔することになるとも知らずに。

王子の懸想と魔王の回想1（後書き）

アカリちゃんは最強少女。シファードには振り回されてもらいます
（笑）

王子の懸想と魔王の回想 2 (前書き)

11月22日修正しました

王子の懸想と魔王の回想2

ミサキの買い物に付き合った帰り道。すっかり暗くなってしまった道を2人並んで歩いてきた。近道して人気のない住宅街を通る手もあったけど、ミサキが駅前のハロウィーンのイルミネーションが見たいというから車通りの多い大通りを通っていた。

なんでも今週末まで駅前の大きな植木にクリスマスみたいに飾り付けされているらしい。そういうキラキラしたのが大好きなミサキは毎日のように見に通っていたはずだけど、「アカリも見るべきだつて!」というミサキの勢いに押されて行ってみることにしたのだ。相変わらず参考書は重いけど、思わぬ掘り出し物で安く新しいノートが買えたからよしとする。無料タダより怖いものはない、なんて言うけど安いものなら問題はない。

「アカリ、アカリ!!」

「なに?」

「一番星!」

まるで子どもみたいに目を輝かせて空を指すミサキに苦笑して空に目を向けた。

都会のぼんやりとした夜空に微かに光る小さな光。最近天气が良か

つたからか、比較的綺麗に見えている。
ほんとだ、とミサキに視線を戻そうとして……

「アカリ！」

悲鳴のようなミサキの叫びと同時に白い光が視界を覆った。星よりずっと強い光に、思わず目を瞑った。急な光に瞼の奥が痛くなる。キキイツツ、という甲高いスリップ音にただミサキを守らないと、という使命感にも似た感情だけが頭を占めていた。

記憶に残るのは。

目が痛くなるほどの真白い光と。死にたくなるほど苦しい現実からやっと逃れられるのだ、という卑怯な安心。ただそれだけ。

そうして唐突にあたしの世界は奪われた。

気が付いたとき、あたしは見知らぬ場所にいた。

耳に入るのはザワザワと騒ぐ木々の音と、ボソボソと囁く誰かの声。何故か懐かしいと感じるその場所は森のようだった。

曖昧な記憶の中で確かにあたしは交通事故に遭ったはずで。目を開けたら病室どころか部屋の中ですらないなんてどういうことだろう。たとえばあたしが運悪く死んでしまったのだとしても、死後の世界が森だなんて話聞いたことがない。

少しパニックに陥って隣を見上げれば羽根を生やしたライオンみたいなヤツと目が3つ尾が2つに分かれた犬みたいなヤツと目が合った。どちらも毛がふさふさで毛並みがいい。あたしを見つめる黒い瞳はライオンも犬も限りなく優しく少し戸惑う。

……いや、それよりも。三途の川ならず三途の森の番人はこんなあからさまに怪物！ってナリをした生きモノなのだろうか、と首を傾げた。天国なら天使的な羽根の生やした少年、地獄ならいかつい閻魔大王、三途の川なら川向こう岸に死んだおばあちゃんが「来ちゃ駄目だよ」て叫んでる。

これが一般的だと思うんだけど、あたしの認識が間違ってるんだろうか。

次に目に入ったのは目映いばかりに輝く美青年どもだった。残念なことにその背に白い翼はない。

こちらをじっと見つめるのは馴染み深い黒髪の人。趣味の悪い真っ白いコートを来て首からはごてごてしたルビーらしき首飾りを下げている。男のくせに二重のぱっちりとした瞳は葉桜を思わせる深い翠で、右目の下から鎖骨にかけて黒で幾何学模様が描かれている。嫌な言い方をすればミミズの這った痕みたいな模様。普通なら不気味さを伴うそれすら彼を引き立たせる要素となっている。

もう1人は金髪碧眼の美丈夫だった。あれだ、脱いだらすごそうな感じ。黒髪翠眼の人より少し背が高い程度なのに、半端ない威圧感を放っている。綺麗な水色の瞳は真っ直ぐにあたしに向けられ、程よい薄さの唇からそっと吐息が漏れる。“歩く18禁”とちよつと

ばかり不名誉なあだ名を付けさせていた。死後の世界って無条件にみんな綺麗なんだろうか、……いや、ていうか誰この人達？

「……だれ？」

思ったことがそのまま言葉になった。寝起きの掠れた声は初対面の美青年たちに聞かせられるものではなかったけれど、気にしている場合ではない。

「……ジーンラウデイス、この娘が魔王と？」

美丈夫がゆっくりと口を開いた。低く耳に響く心地よい声。どうやら美青年は美声だという法則でもあるらしい。

前々から思っていたけど、天は人に二物を与えず、なんて大嘘だ。まさか死んでからも実感するなんて思わなかった。

この男、美貌に美声に与えられまくってる。女にしては低めな自分の声があたしは好きじゃない。あたしだって女の子らしく「キャッ」とか言ってみたい、……いや想像しただけで吐きそうになるからそれはいいけど。髪が短ければ男だね、と言われ続けたこの声はコンプレックスだったりする。

「この娘、どう見てもヒトだと思っただが」

この美丈夫、ミサキの好みど真ん中な顔だなー、と遠い目をしてハッと気付く。

百歩譲ってここが死後の世界だとして。白い光に包まれて、スリッパ音を耳にして、鈍い衝撃も食らった気がするから死んだ可能性は多いにある。ならミサキは？あたしの隣にいたミサキも何かしら被害を受けたはずだ。咄嗟にミサキを庇うように立ったけど、あの子を守ることはできなかったんだろうか。弱くて可愛い、あたしの幼馴染み。

「アカリ？」

聞き覚えのある声にビクリと肩を震わせた。

……ああ、この声は。

「……ミサキ、」

「JJJJ、JJJJ？」

きょとんと辺りを見回すミサキに分からない、と首を振る。

ミサキがここにいる。それならここが死後の世界であるわけにはいかない。あたしは彼女を死なせるわけにはいかないのだから。

「ね、アカリ！」

「ん？」

「なんかすごい美人さんがいるよ！」

「……そだね」

能天気かつ難しいことが嫌いなミサキは考えることを放棄したらしい。目の前に立つ2人に目を止めキヤイキヤイと大騒ぎ。

でもさすが美青年。騒がれ慣れているのか、表情1つ動かさず真っ直ぐにライオンと犬を見つめている。

「ヒトの王子、何度言わせる気だ。この御方こそ我らが主。400年もの間待ち続けた魔の王であらせられる」

低い低い空気を震わせるような声に驚いて隣を見上げた。そこには牙を剥いて唸るライオンさん。目がキラキラしていて、どうやら怒っているらしいことが分かる。

いや、ていうか、……え？喋った？この羽根の生えたライオン喋った？

動物の骨格上、人間と同じ言葉話すことは不可能だ。「い」とか「お」とかそういう口の形が取れないからだ。なのに、え？喋った？

「しかし、ジーンラウデイス……」

「ヒトの王子、おまえは何か勘違いをしているようだ」

嘲るような声音はたしかにライオンが喋っている。表情の変わらぬはずの顔はなぜか嘲笑を形作り。……死後の世界の動物はいろいろ規格外らしい、と無理矢理納得することにした。

「野蛮で下等な魔のモノがヒトの形をとるはずがないと思っているのか。自惚れも大概にしる。ヒトはただそこに在るのみ。微小ながら我らが力を持つ者も生まれるようだが、それだけだ。ただ世界にあるものに依存し、破壊し生きていくだけにすぎん。傲慢になるなよ、ヒトの王子。そなたらヒトが優れた種族だと妄想するのも、我らが種族を野蛮で下等と評価するのも大いに結構。だが世界の頂点に居るのはヒトだなどと過信しないことだ」

そう言つてライオンは鼻面であたしの頬を押した。鼻はしつとり濡れていて、「あ、生きてるんだ」とぼんやりしながら考えていたライオンロボット説を慌てて打ち消す。

「ヒトの王子、ジーンの言うことをよく聞いた方がいい。最近のヒトの傲慢ぶりは目に余る部分がある。加えてヒトは救いようのないほど愚かだ。特別でありたいと望むくせに異端を嫌う。まったく理解できぬな。ヒトの王子、覚えておくといい。魔のモノもただの馬

鹿ではない。むやみやたらに異端を排除しようとはせぬ程度にはな
3つ目のワンコも馬鹿にするようにそう付け足す。二股に分かれた
尾がゆらゆらと揺れている。

「我らが魔王を侮辱するなら、その魂喰らってやってもいいのだぞ
？まずい肉は好まんが魔王のためとあらば仕方あるまい。忌み子の
肉であるつと骨の髄まで喰らい尽くしてやる」

何やら物騒なことを言っつてワンコがあたしの頬をべろりと舐め、

…は、魔王？

今まで美青年やら、喋るライオンと犬やらに気を取られてスルーし
てたけど“マオウ”つてナニ。魔王か、魔王なのか。……なんかす
ごく嫌な予感がするんですけど。

「ああ、主。こんなに冷えてしまつて。毛皮がいらいますね。火をお
こす方がよいでしょうが、我らはあまり火を好みませぬ故。もうし
ばらくお待ちください。あたたかい飲み物も用意させますから。…
…ああ、こんなところに傷が。すぐに薬を用意させましょう。他に
痛むところは？まったくヒトの体は脆すぎる」

犬がペロペロあたしの頬を舐めながら、なにやらぶつぶつ言ってい
る。もふもふした動物は好きだし、大型犬も好きだけどこれは
なにか違う気がする。

「ガリケイドポマス、あまり舐めるな。少し落ち着け」

「ジーン、これが落ち着いていられようか。我らが主、魔王だぞ？
それもこんなに弱々しいとあらば護らねばなるまい。それともおまえは放置しろと言うのか」

ワンコが嬉々として吠えるとライオンはうーむと唸る。そうしてじつとあたしを見つめたかと思うと優しい手つきであたしの舐められていない方の頬を右前足の甲で撫でた。
どっしりとした前足はふわふわしていて撫でられると心地よい。

「我らが主、お待ちしておりました」

囁くように言う声がライオンのくせに色っぽい。耳の奥で反響して残る甘く涼やかな声。……ライオンのくせにいい声していやがる。

いや、違う。流されるな、あたし。

「あたし魔王じゃありませんけど」

たしかにミサキに近づく愚かな男どもを蹴散らしていたせいで“死神”なんて呼ばれてたけど。“魔王”と呼ばれたことはない。魔王っていえば、勇者に倒されるラスボス的なヤツくらいしか思い付かないのはあたしの想像力の乏しさのせいじゃないはずだ。RPGに

せよ、ファンタジーにせよ魔王は悪者、正義に倒される極悪非道なラスボスだったはずだ。

……無理、ラスボスは無理。そんな大役あたしにはとてもじゃないけど務まらない。ミサキ以外のために暴力を振るう気もない。どうしても何か役割が必要なら勇者のスキルアップのための雑魚キャラでいい。それでいいから、とりあえず巻き込まないでいただけませんか。

王子の懸想と魔王の回想2（後書き）

パニックのあまりアカリちゃん暴走中。

ジーンラウデイスとガリケイドポマス率いる魔のモノたちは魔王さま史上主義。魔王さまがいればなにもいらぬ。

王子の懸想と魔王の回想 3 (前書き)

おかしいな、シファードはもっと冷静真面目キャラだったはずなのに……

王子の懸想と魔王の回想 3

「わたし、魔王じゃありませんけど」

一時的なパニックが少し落ち着き、冷静になったあたしが放ったその一言は一気に空気を凍らせた。あたしを挟む2匹の獣はピクリと耳を動かし、2人の美青年はその美麗な顔にあからさまな驚きを浮かべた。ちなみにミサキはというと、ライオンと犬が喋ったことより目の前の美青年の方に關心があるらしく、目をキラキラさせたまままだひたすら2人に見入っていた。

「主上、何をおっしゃいますか。あなた様は魔王、我らが待ち望んだ4000年ぶりの王でございます」

3つ目ワンコが取り繕うように笑う。耳が垂れてちよつと困った顔。犬か猫かと聞かれたら猫派だけど基本あたしはもさもさした動物が好きだ。たとえ目が3つあるとそらは変わらずそんな困った顔をされたらなんでも許してしまいそうになる。でもこれは譲れない。こんなわけの分からない世界で魔王なんかにされちゃたまったもんじやない。

あたしは人間だ。魔王でもなければ、死神でもないのだ。こんな奇怪な生き物に囲まれて、目の前には極上の美青年を侍らせていなければならぬ理由も義理もない。夢なら夢で早いとこ醒めてもらわ

ないと困る。まだ明日も予備校はあるのだ。もう年明けまでの授業料は振り込んでしまつてあるから、寝坊で休むなんて勿体ないことしたくない。

「誰と勘違いしているのか知りませんが、わたし人間ですから」

その発言にピクリと反応したのは、今度は2匹の獣じゃなく目の前の金髪碧眼の美丈夫だった。じいーっ、と効果音が付きそうなくらい見つめられている。宝石みたいな瞳は揺らぐず、ただ純粹な好奇心のみがその瞳を輝かせている。……は？好奇心？

「魔王どの、」

美丈夫は目を逸らすことなく口を開いた。嫌な予感がしてあたしは無意識に一步後ずさる。危ない、危ないよこの人。なんで一瞬も目逸らさないの……！

「わたしはシルヴァニア王国第三王子、シルヴァニア・セルターニヤ・シファードです。これは魔術師、ヤーリヤ・ハリス」

「……この馬鹿王子付きの王国一級魔術師、ヤーリヤ・ハリスです」

黒髪翠眼の青年は「馬鹿王子」の部分だけを強調して微笑む。その後ろに般若を見た気がしてあたしはそれとなく視線を逸らした。こ

の人、怒らせたらいけない人だ絶対。

「……^{ナカスガワ}中須川 ^{アカリ}灯です。こちらふうに言うとなぶんナカスガワ・アカリになると思います」

「ア、ア、アキヤイ？」

「いえ、アカリです」

たどたどしい発音であたしの名前を復唱する第三王子どのにやんわり訂正を入れる。「ア、ア、ア、ア、」と死にかけてた蝉みたいに繰り返す姿は見ようによつては『萌え』かもしれない。その証拠に隣のミサキは口元に手を当てて悶えている。残念ながらその『萌え』はまったくあたしに届いていないが。

「ア、アサリイ？」

「いえ、アカリです。ちなみに言えばそれは貝です」

「アセ、リ？」

「いえ、アカリです。焦りは禁物だと思います、ええ」

「アキヤイ？」

「いえ、アカリです。振り出しに戻ってます。ていうか、もう発音はいいです」

「いえ、そういうわけにはいきません。魔王どのの御名前が発音できないなど自分で自分が許せません……！」

「ああ、そうですね」

熱く語り出す王子さまはとりあえず無視だ。あんまり関わりたくない空気がムンムンだ。

シルヴァニア王国って言ったか。あたしの頭の中には赤い屋根の家に住むうさぎやくまが浮かぶけどそれとは違うだろう、さすがに。王子に魔術師、なんてまるでお伽噺だけど生憎あたしはそれにキヤーキヤー言えるほどの女の子らしさも美形2人を目の前に頬を染める可愛らしさも持ち合わせていない。あたしにあるのは女の子にあるまじき度胸と冷静さだ。

「それでシルヴァニア王国の第三王子どのと王国一級魔術師さまが一介の女子高生に何の御用ですか」

「ジョシコーサー？」

変な発音で首を傾げる魔術師さま。黒髪がサラリと揺れる様は綺麗だけど翠の瞳が警戒するように細められている。

「いえ、こっちの話です。気にしないでください。わたしが言いたいののはあたしは一般人だってことです。魔王でもなければ死神でも

ありません。ただの市民、村人Bくらいの役割しかないわたしに第三王子どのと王国一級魔術師さまが直々に御用だなんてあり得ないでしょう。それともこれはたまたま偶然あなたがたと出会ってしまっただけが不幸だったんでしょうか。いや、これがわたしの夢だとしたらそんな都合主義もありですけど。でもわたし生憎とこんなファンタジックな夢を見るほど幼くもなければ女の子らしくもないですよ。ていうか、初対面の人間にいきなり魔王とかふざけんなよコノヤロウ」

息継ぎなしで言い切れたことにちよつと満足しつつ、あたしも負けじと第三王子どのを見つめた。金髪に水色の瞳、整いすぎた顔立ち。この訳の分からない世界でもあたしの知る美的感覚が通じるとするなら、女の子が放っておかないであろう美形だ。その上赤い屋根のおうちの国の王子さまという肩書き付き。モテないはずがない。はずがなのに第三王子どののはあたしの視線に恥ずかしそうに頬を染める。……いや、なぜそこで恥じらう。

「ま、魔王どの、そんなに見つめられては……」

「……………、それはそれは申し訳ありません。王子どのがあまりにわたしを見つめていらっしやるので、それが礼儀なのかと思ひまして」

皮肉100パーセントで返せば、なぜか「見つめるなんてそんな……」と照れ始める。そわそわと口元を気にしながら、あたしから目を逸らす。その様子を見ながら魔術師さまは呆れ顔。どうでもいいから、この無駄なシャイボーイどうにかしてもらえませんか。

「ヒトの王子、あまり主に近づかないでください」

あたしの願いを叶えてくれたのはそれまでじつと黙っていたライオンだった。未だ恥ずかしそうにわたわたしている美丈夫に事も無げに拒否の言葉を吐く。

3つ目の犬はどこからともなく取り出した毛布をあたしにいそいそとかけてくれる。まるで保護者だ。

でも毛布はほかほかと温かくて、花のような甘い匂いもする。状況も忘れて思わず毛布に顔を埋めた。

「ジーンラウデイス、提案がある。取り引きをしないか」

「……内容によるな」

まだ照れの色を残しながら、不意に第三王子どのが真剣な声を出した。それにライオンは目を細めて鷹揚に頷く。見れば見るほど表情豊かなライオンだ。真っ黒な瞳は利口そうだし、その言葉はどこまでも思慮深い。

「いいのか、ジーン。ヒトの提案などに乗って。我らの主はアカリ様お一人。ようやく還られた主さえいれば我らの望むものはない」

「だから内容によると言っておろす。主に危害を加えるとあらばすぐに始末する」

ライオンはあたしの頬を愛しげにペロリと舐める。さっきから第三王子どのといい、3つ目の犬といいどうしてこうも突然現れた女に優しくできるんだろう。悪いけど一目惚れされるような容姿じゃないことはこの18年間で嫌というほど分かってる。いつだってその対象はミサキだ。なのになんだこの待遇は。女の扱いに慣れてるのか？慣れてるんだな？

「魔王どのは非力なヒト型をしておられる。おまえたち魔のモノでは勝手が分からず魔王さまにもご不便をかけるだろう。どうだろう、オレたちシルヴァニア王国が魔王どのを預かるというのは」

「……………なに？」

「王宮なら魔王どのお守りすることも可能。白の癒師^{ユンダン}団もある。衛生面も技術面もなんら問題はないと思うが？」

ヒュツと息を呑む音が聞こえた。魔術師さまが口をパクパクさせて驚きを表現している。そんな顔もできたのか。この人はもつと感情の出にくい人だと思っていた。

「シファード様……！何をお考えですか！我らの元々の役目は魔のモノの撤退要請にございます！それを諸悪の根源を王国に連れ帰ろうなど何をお考えか！」

驚きのあまり何も言えない魔術師さまに代わって、それまで第三王子どのの後ろで少しも隊列を乱すことなく立っていた集団の先頭にいた男の人が悲鳴のような声を上げた。近衛兵だろうか。騎士服らしき服装は簡素で動きやすそうだし、腰にはシンプルな実戦向けの剣。先頭にいることだし隊長かもしれない。

彼の言っていることは正しい。“魔王”なんて呼ばれてる不審人物、王子さまの傍に置くななんて危なすぎる。

「グリフィス、言葉を慎もうか」

そんな常識人に穏やかな叱責を飛ばしたのは意外にも魔術師さまだった。翠の瞳が鋭く隊長（仮）を射すくめた。口元に浮かぶ笑みとは反対にひどく冷たい視線なのに隊長（仮）は臆することなく抗議の声を上げる。

「しかし……！」

「魔のモノは悪じゃないよ。悪はベルリアーナであり、使役された魔のモノたちに非はない。ラスティアーナ様のお言葉を忘れた？」

「そついうわけではっ、」

「魔王と言えどこの子はヒト型。それも少女のナリじゃ大したことではないでしょ。それより王国で預かって力の制御を学ばせることの方が重要。違っ？」

「ですが、危険すぎます！仮にもシファード様はシルヴァニア王国

第三王子。魔王を傍に置くなど殺してくれと言っているようなものです！」

「グリフィス、君がどれだけシファードを忌み嫌おうとコイツは第三王子だよ。仮に、だとしてもね。意見できるのは白を持つ神殿関係者と王国一級魔術師のみ。分かってるよね？」

魔術師さまの黒い笑みを前に隊長、グリフィスさんは渋々と言った様子で頷く。いいのか、「第三王子を忌み嫌う」とか言われてるけど否定しないで。反逆罪とか問われたりしないのか。

「……ヒトの王子、我らが魔王を利用しようと言っのか」

ライオンが唸るように牙を剥く。不機嫌そうに黒い翼が揺れた。

「国の強みにしようと、そういうわけか」

「そうではない。言ってるだろう、これは取り引きだ。双方の利害が一致してこそ成り立つ。悪い話じゃないと思うが。王国は脅威と成りうる魔王に恩を売れる。おまえたちは魔王の力が安定するまで魔王の“守り”を手に入れられる」

「つまり主上が力を制御できるようになったら我らの元へ戻ってこられるということか」

そつだ、と頷く第三王子どのに3つ目の犬が鼻を鳴らす。

「ヒトの言うことなど信じられるものか。魔王を有するとあらば他国への牽制になる。それにシルヴァニア王国は今跡目争いの真つ最中と聞く。魔王を連れ帰り手懐けた王子とあらばいくら娼婦の子といえど臣下からの印象も変わろう。なるほど、魔王の存在は『利』になるだろうな」

「王位継承になど興味はない。あれば激化する跡目争いを前にこんなところにノコノコやって来たりしない。それこそ後れをつることになるからな」

淡々と言い返し、第三王子どののはあたしに手を差し出す。威嚇するように低くライオンが唸った。

「魔王どの、我らと共に」

差し出された手を眺める。およそ王子さまらしくない手だった。あかぎれ、ささくれこそないものの剣ダコができて節樽立っている。王子さまってもっと綺麗な手をするもんじゃないんだろうか。早く握れとばかりにずいと目の前に手を出される。けれどその手を取ったのはあたしじゃなかった。

「行こう、アカリ！」

目をキラキラさせてあたしに笑うミサキ。さあ早く、と言わんばかりにあたしの腕を引き第三王子どのの隣に立つ。

こうしてあたしたちはシルヴァニア王国の『所有物』となった。

アカリは何を考えているのか羽根ペンをゆらゆらと動かしながら物思いに耽っている。

あの夜の邂逅をオレはまだ忘れられずにいる。最強の魔のモノと言われるジーンラウデイスとガリケイドポマスを従えて、オレに向けられる視線は真っ直ぐで見たことがないほど強い光を灯していた。その光に囚われた。ただ欲しい、とそれだけを思った。

「アカリ？」

ようやく発音できるようになった彼女の名を呼べば、あのときと同じ強い瞳がオレを映し出した。

「ああ、まだいたんですか」

そんなことを言っただけでアカリは立ち上がる。そのまま部屋を出ていこうとするから慌てて引き留めた。こうやってちゃんと捕まえておかないと彼女はいつもふらりとどこかへ行ってしまう。

「なんですか。これからミサキのとこ行くんですけど。あ、一緒に行きますか。あなたが一緒の方があの子も喜びます」

「いや、そうじゃなくて、」

「ああ、またお小言でも言われたんですか？それとも嫌味？何度も言ってるでしょう。そんなの気にした方が負けですよ」

サラリとそう言っただけで彼女は笑ってみせる。オレには真似できないほど真っ直ぐで強い娘。手が届かないと知っているから焦がれるのか、それともだからこそ手に入れたいと思うのか。どちらにせよ眩しすぎるくらい光に満ちた娘だった。

「……一緒に行こう。菓子もある。今民の間で人気の菓子らしい。珍しくハリスが買ってきた」

手に持つ包みを持ち上げて見せれば、

「あの腹黒魔術師が珍しい。セルターニヤ様が毒味してくださいね」

敬語が嫌いだと言いつつ少女はあのどつしよつもなく惹かれる光を和らげて笑った。

王子の懸想と魔王の回想3（後書き）

以上、アカリちゃんの回想シーンとシャイボーイシファードの恋の芽生え（盛大にハテナ）でした

アカリちゃんとシファードの会話中の1人称の違いは仕様です。ちなみに「主上」は天皇の尊称らしいのですが、作品中では魔王の尊称としています。

友人の待遇と王子の対応（前書き）

遅くなりました。申し訳ありません。

友人の待遇と王子の対応

「ミサキ、今大丈夫？」

窺うように顔を覗かせたアカリに「平気だよ」と微笑んでみせる。ひよこりと部屋のドアから顔を覗かせたままアカリは笑い返してくれた。

あの日、あたしを守るように迫る車の前に立ったアカリの表情をあたしは忘れられずにいる。死ぬかもしれないというのに、アカリは信じられないくらい穏やかな顔をして「これでやっと、」と呟いた。その意味に気付きながらあたしはまたアカリに守られたのだ。

アカリはいつもあたしを守ってくれていた。ナンパされたときも、質の悪い男に付きまとわれていたときもアカリが助けてくれた。アカリだけがあたしの唯一の味方だった。明るくて、優しくてみんなの中心にいるアカリを繋ぎ止めておきたくて、意味もなく駅前を彷徨^{ロウ}いてみたり、声をかけてくる男たちに騙されたフリをして暗い路地裏に入ってみたりした。純情で弱い女の子であり続ければアカリは傍にいてくれた。あたしが助けてと泣けばアカリはすぐに手を差し伸べてくれるし、嫌だと首を振るだけでアカリは嫌なもの全てを取り払ってくれる。それでも。それでも、まだ足りない。根本的な苦しみをアカリは拭い去ってくれない。アカリが優しすぎるからあたしはまた苦しくなる。

「アカリ、あまり走るなど言っているだろう。転んだらどうするんだ」

まるで保護者みたいなことを言いながらアカリの後に続いて入って来たのはこの国の第三王子、シファード様。綺麗な金髪に宝石みたいな水色の瞳。カッコいいなんて言葉じゃ言い表せないほど綺麗な男の人。“魔王”であるらしいアカリに絶対服従でまるで忠犬みたいに付き従っている。アカリが敬語は嫌いだと言ったから彼はタメ口で話すし、アカリがあたしの安全確保を要求したから彼はあたしを王宮で保護することを承諾した。……それが少し気に入らない、だなんて贅沢すぎて言えない。だって右も左も分からないような理の違う世界であたしはアカリがいないと生きていけないから。

「セルターニヤ様も人のこと言えないでしょう。この前ハリスさんが小さいときのセルターニヤ様はヤンチャでよく怒られていたって言うてましたよ」

心配して伸ばされたシファード様の手をすり抜けてアカリはあたしの隣に立った。あたしより頭一つ分背が高いアカリはポンポンとあたしの頭を撫でて人が悪い笑みを浮かべている。

シファード様が映すのはいつもアカリ。魔術師のハリスが映すのもアカリ。あたしのためにとシファード様が付けてくれた2人の侍女も、護衛のためにとアカリが無理に頼んでくれた騎士も気にするの

はアカリのことばかり。

どこの世界にいたっていつだって大事にされるのはアカリなのだ。親も兄弟もクラスメイトも、歴代彼氏さえもアカリの味方。「中須川に付きまとうのやめろよ」と言われたこともある。「純情ぶってアカリちゃんの同情引こうとしてるくせに」と詰られたこともある。あたしがアカリに引っ付いて離れないから、アカリがあたしのためにあたしが嫌だというものを排除しようと頑張るから、あまりにアカリが可哀想だってみんなが口を揃えてあたしを責める。

アカリは知らないだろう。アカリのせいであたしに敵が増えていること。アカリのせいで彼氏が長続きしないこと。

真っ白なアカリの隣じゃ、あたしの黒さが目立つから。みんなアカリがいいと離れてく。それでもあたしがアカリから離れないのは、……離れたくないと思うのはアカリだけがあたしの味方であたしを守ってくれるから。その居心地のいい空間に浸っていたい、ただそれだけの自己本意な思いがあるからだ。

「またアイツは余計なことを……、」

「真実ですよ、シフアード様」

「ハリスさん！おはようございます」

パツと表情を明るくして白づくめの魔術師に駆け寄るアカリをシフアード様が不満げに見つめている。

アカリはなぜかこの魔術師になついていた。アカリがここまで異性に興味を示すのはあたしの記憶にある限り初めてだ。たしかに顔は綺麗だと思うけど、腹の中は絶対真っ黒だ。アカリにそう言ったら

「たしかに腹の中真っ黒そうだよね、ハリスさん」と笑うだけではぐらかされてしまった。

「おはようございます、アカリ様。今日もお元気そうでなにより」

「おかげさまで元気ですよ。どこかの誰かのおかげでプライバシーもなにもあったもんじゃありませんが」

アカリはニツコリと笑みを深めて、手首に付いたブレスレットを揺らして見せる。たしか先週ハリスさんに貰ったと見せてくれたブレスレットだ。細いチェーンに赤い石が1つ付いたシンプルだけど可愛いデザイン。シフアード様が気に入らないと顔をしかめていたからよく覚えてる。

「もうバレましたか」

「あなたが教えたんですよ、自分の魔力は赤色だって」

「……ああ、そうでしたね」

ハリスさんが大して悔しそうな素振りも見せずに微笑んだ。

それは子どもの成長を喜ぶ親のような笑みだけど、その奥に隠された甘さにきつとアカリは気付いていない。あの子はいつも何でもない顔をしてあたしの欲しいもの全部持つていってしまう。それに気付いてすらいないから、あたしは嫉妬することすら許されない。

「ところでこれ、色が薄くなってるんですけど大丈夫ですか」

「どうせもう気付かれています。探査の術の意味はないでしょう」

「いや、そうじゃなくて。これ、曲がりなりにもあなたの魔力を封じ込めたモノでしょう？いわば体の一部の魔力が消失、……というよりあたしが吸収しちゃてると思うんですが」

ああ、とハリスさんは頷いてアカリの手首を掴んで自分の視線まで持ってきた。……一度たりともシファード様の視線がアカリから離れることはない。

「こうやって何か別の物質に魔力を封じ込めた時点でこの魔力は僕のモノではありません。アカリさんが吸収して拒絶反応を起こさないところを見ても魔力の質がアカリさんに適合したんでしょう。問題ありませんよ」

「へえ。たしかに拒絶反応らしきものは感じないですけど。これ吸収し終わったらどうなるんです？」

手首に光るチェーンを口惜しげに見つめるアカリにハリスさんは目を緩める。

「それは魔力を封じて術を永續させるために作ったものですから吸

収終了と同時に割れます。そんなブレスレットでよろしかったらまた差し上げますよ。魔力が吸収されないように加工しておきますから」

「ほんとですか！実を言うとあの赤色好きだったんですよねー」

嬉しそうに笑うアカリから目を逸らした。

小さい頃からアカリはあたしの憧れだった。人見知りせず、誰とでもすぐ仲良くなれるアカリ。同性から徹底的に嫌われていたあたしにも分け隔てなく接してくれた。あんまりアカリが優しいからあたしはアカリに引っ付いてまわった。人気者の彼女といれば悪口を言われることも仲間外れにされることもないことを知っていた。アカリは何よりイジメを嫌ったから。

「ミサキ？どうしたの？お腹へった？」

「うっん、平気だよ」

あたしを気遣うアカリは小さい頃から変わらない。みんなに平等に優しく、あたしにだって笑顔を向けてくれる。

それが辛いだなんて。

全てをかけてあたしを守ってくれるアカリに言えるはずがなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8083o/>

魔王さまの憂鬱

2011年12月24日09時53分発行